

# 青森県近代文学館報

## 「特別展 青森県近代詩のあゆみ」開催

会期 平成二十年七月十二日（土）～九月七日（日）

青森県近代文学館では、七月十二日から九月七日までの会期で、特別展「青森県近代詩のあゆみ」を開催します。

我が国近代詩の夜明けを告げる『新体詩抄』（明治十五年）刊行からおよそ十五年、明治三十年代の中央詩壇は北村透谷、島崎藤村らが活躍する浪漫主義の高揚期を迎えていました。この頃新体詩を書きはじめた本原の大塚甲山は、文芸誌「新小説」等に農民詩・反戦詩を発表。島崎藤村の影響を受けた秋田雨雀、鳴海要吉は、それぞれ詩集『黎明』、『乳涙集』を刊行しました。大正期に入り、詩集『太陽の子』（大正三年）を刊行して口語自由詩を開拓した福士幸次郎は、一戸謙三、高木恭造ら郷里の若い詩人たちに影響を与え、本原初の詩の結社「パストラル詩社（大正八年）」や方言詩集『まるめる』（昭和六年）などに結実させました。その後も、本原からは菊岡久利、村次郎をはじめ多彩な詩人、詩集、詩誌が生まれていきます。

本展は、これら青森県の近代詩のあゆみを概観するものです。



大塚甲山



福士幸次郎



高木恭造

### 目次

- ・特別展「青森県近代詩のあゆみ」開催：1
- ・特別展「陸羯南と正岡子規」開催の記録：2
- ・羯南・祖母達―特別展によせて（最上義雄）：3
- ・陸羯南と笹森儀助（松田修）：4
- ・新収蔵資料紹介 残月帖：5
- ・資料寄贈者紹介：6～9
- ・平成19年度企画展開催報告：9～11
- ・「作家の手紙展」に寄せて（徳次男）：9
- ・「淡谷悠蔵展」に寄せて（三野亜沙子）：10
- ・注目の作家「小野正文・成田千空を偲んで」：11
- ・第六回青森県近代文学館川柳大会開催：11
- ・パネル展開催「ギャラリートーク実施」館務日誌：12

### 平成二十年度企画展

□四月二十六日（土）～六月八日（日）

次の二つの企画展を同時開催します。

「没後一〇〇年―鳥谷部春汀と『太陽』」

明治後期に雑誌「太陽」を主宰し、人物評論の第一人者としてその名を知られた鳥谷部春汀（現五戸町出身）の生涯と業績を概観します。

「寺山修司―孤独な少年ジャーナリストからの出発―」（国際寺山修司学会と共催）

中学時代の学校新聞の編集を皮切りに、文芸誌への投稿や俳句誌の創刊など、俳句を中心とした寺山のジャーナリストとしての活動に光を当てます。

□企画展「葛西善蔵没後八〇年展」

十月十一日（土）～十一月二十四日（月）

「文芸の前には自分は勿論、自分に付随した何物をも犠牲にしたい」という決意の下、多くの私小説を描き「芸術の苦行者」として大正文壇で注目された作家、葛西善蔵（現弘前市出身）の生涯を振り返り、善蔵文学の魅力に迫ります。

### 常設展示室展示替え

四月一日（火）から、常設展示室のジャンル別作家のコーナーに、村次郎の紹介パネルを設置します。また、展示資料の一部を展示替えします。

#### 【展示替え資料】

- ①村次郎 詩集『忘魚の歌』
- ②秋田雨雀 画賛色紙「生誕五十年に際してそこには殆んど二世紀の間民衆解放のために働いて来た巴里コムミュン」の老闘士もゐた。」（須山計一画）
- ③葛西善蔵 書幅「仰山曾不遊山」他

### 資料集刊行

当館の資料集第五輯として『太宰治・旧制弘高時代ノート「英語」「修身」』を刊行します。太宰治の旧制高校時代の自筆ノートは、太宰の学生時代の文学的自己形成をうかがうことのできる貴重な資料として、かねてより注目されてきました。この度「英語」と「修身」のノート二冊の全容を写真版で公開することにしました。

特別展「陸羯南と正岡子規」開催の記録

会期 平成十九年七月十四日(土)

～ 九月九日(日) ～

陸羯南の生誕百五十年、没後百年を記念して羯南のジャーナリストとしての業績を振り返ると同時に正岡子規との関係に光を当てる展覧会「陸羯南と正岡子規」を開催しました。開会式では羯南の曾孫にあたる最上義雄さんを東京からお迎えして、弘前の陸羯南生誕百五十年没後百年記念事業実行委員会の事務局長館田勝弘さんに加わっていただき、テープカットを行いました。

この特別展では、新聞「日本」の創刊号をはじめ、今まで埋もれていた貴重な資料を発掘展示し、日本新聞社について新たな事実をいくつか提示することができました。また子規と羯南との関係を書簡で確認できるような展示をこころがけました。さらに日本新聞社に在籍した青森県ゆかりの人物にも焦点を当てたコーナーも設けました。

図録は巻頭に鎌田慧「羯南と子規」、榑引室長の「羯南小伝」、羯南の思想的な方面を論じた本田逸夫「『日本』新聞と陸羯南の『国民主義』」、和田克司「陸羯南と正岡子規」、雪嶺と如是閑を論じた小山文雄「羯南をめぐる近代言論界の巨人二人」、鳴海康安「巖城の詩碑」、羯南と子規の対照年譜から構成し、充実したものとなりました。



開会式(テープカット) 左から館田勝弘氏、最上義雄氏、黒岩恭介文学館長

特別展開催にちなみ、県立図書館集会所で文学講座を、研修室で日曜講座を開催、演題と講師は次の通りでした。

文学講座

七月二十八日(土)

「陸羯南と正岡子規」

和田克司(大阪成蹊短期大学教授)

八月十九日(日)

「陸羯南と佐藤紅緑を中心として」

斎藤三千政(青森県郷土作家研究会理事)

「陸羯南と笹森儀助」

松田修一(東奥日報社編集委員)

日曜講座

八月十二日(日)

「名山の詩碑」

榑引洋一(青森県近代文学館室長)

八月二十六日(日)

「陸羯南のことなど」

黒岩恭介(青森県近代文学館館長)

◇フォーラム

九月一日(土) 弘前文化センターで、陸羯南生誕百五十年没後百年記念事業実行委員会との共催で「陸羯南生誕百五十年没後百年記念フォーラム」を開催しました。出演者は、次の通りです。

□基調講演「陸羯南と正岡子規」

講師 復本一郎(神奈川大学教授)

□フォーラム「人間 陸羯南」

コーディネーター

復本一郎

パネリスト

鎌田 慧(ルポライター)

本田逸夫(九州工業大学教授)

竹田美喜(松山市立子規記念博物館館長)

基調講演で復本一郎氏は、正岡子規を生涯にわたって庇護した大恩人・陸羯南を、子規が猛然と批判した書簡(明治三十一年四月一日・羯南宛)を紹介しました。復本氏は、子規は「美意識」を羯南は「言葉」を優先するという二人の根本的な短歌観の違いを指摘。子規が「歌よみに与ふる書」を発表し短歌革新の第一声を上げた頃のことであり、短歌革新をやり遂げる決意からやむにやまらず書いたのだらうと推察しました。また、犬養毅、三宅雪嶺ら羯南にとって気心の知れた仲間を集まり「長清会」を紹介しました。

フォーラムの口火を切った竹田美喜氏は、子規の後半生を支え、子規の名を

短歌革新の旗手として残してくれた羯南は、松山人にとっての大恩人。羯南の心の広さが子規を育ててくれたと感謝の思いを語りました。

鎌田慧氏は、ジャーナリストはオピニオンリーダーとしての責任があり、国家権力と対峙し新聞人としての自由を駆使していった羯南は、日本のジャーナリズムの先駆けであり誇りであると評価しました。

本田逸夫氏は、羯南の魅力として①無駄のない端正な文章と人柄②寛容で自由な精神③視野の広さ④自分の信念・理想にこだわり自立を保ったことを挙げ、この催しは一過性のブームではなく、羯南から学び続けていくきっかけになれば羯南の本望と結びました。



フォーラムの様子 左から竹田美喜氏、鎌田慧氏、本田逸夫氏

## 羯南・祖母達―特別展によせて 最上義雄

昔、大学入試に出題された「陸羯南」を日本人とは考えずに答案をでっちあげた話を友人から聞いた事がありますが、私にとつては陸羯南は、常に身近で親しい存在でした。

世間一般では、曾祖父母は疎か祖母についてすら必ずしもよく承知していないのが常でしょうが、私の場合、幾つかの偶然が重なった結果、四女の巴祖母を始めとする陸姉妹達から長年に亘って父羯南に関する種々の話を聞く機会に恵まれ、「羯南」は物心がついた頃から馴染みのある懐しい響きを持った名前だったので。即ち、祖母は、父の逝去時既に十四歳になっており生前の羯南や隣人子規の様子をハッキリ記憶していたこと、長寿に恵まれた陸姉妹の中でも最長寿者でありかつ平成三年に九十八歳の天寿を完うする四五年前迄、生来の強記は衰えを見せる事なく、為に昭和十三年生れの私であっても物心ついて以来約四十年に亘って思い出話を聞く機会があったこと、終戦直後から居を構えていた葉山(二色)には、戦後六十年に垂んとする期間、陸姉妹七人の内(京都の鈴木家に嫁した次女鶴代を除き)六人が仲よく一緒に暮しており、其処は小学生の頃から社会人になる迄毎年の様に正月春夏の休みの折泊りがけて過した場所でしたが、仏壇の羯南・つ夫人の

写真が見おろす茶の間で一緒に食事をするのが常でその食卓で何気なく交される昔話を聞くともなしに聞いていたのでした。(今となってみると、録音でもしておけばよかったです。) 又同じ敷地内には嗣子四郎一家も居を構えており日常の交流がありました。

ソナナ訳で、昨年青森・弘前両市からお招きを頂いた時は大変嬉しく感謝の気持ちを持って諸行事に参加させて頂きました。又、祖母が中心になって保存しており生前その管理を委ねられた羯南の遺品の、展示会への出品御依頼に対しては可能な限りご協力申上げた次第です。七月・九月の二回青森県近代文学館と弘前市立郷土文学館を訪れる事が出来、弘前では、館の開設以来祖母が寄贈させて頂いた、葉山の家にあった、羯南愛用の懐しい家具等にも再会する事が出来ました。

しかし、今回得た最大の収穫は、色々な方々と交流出来た事だと思っております。

展示会の参観者数が示す地元の方々の羯南への関心の高さに触れ、開会式・シンポジウム・懇親会・狼森羯南碑訪問等を通じ、相馬弘前市長始め教育委員の方々、四国松山から馳せ参じられた竹田子規博物館長、鳴海先生、笹森氏、大山謙一氏(後に洋三氏)その他多くの方々にお会いする事が出来ました。更に日頃疎

遠であった羯南の曾孫達と会食する機会も得ました。陸姉妹七人の内四人は生涯独身を通しましたが、嫁した三人のうち鈴木(次女鶴代)系に六人、最上系に四人、四郎系に二人計十二人の曾孫がおりますが、鈴木系最上から六人が配偶者等も交え弘前に集まったのです。

出合いの中で、とりわけ印象が深かったのが「羯南研究会」の存在でした。

精力的な高木宏治主筆のリーダーシップの下、四十名の現役サラリーマンを中心とする約二十名のグループで、原点は、産経新聞時代の同僚だった司馬遼太郎氏(「人々の覚音」執筆時、取材の為に葉山に祖母を訪ねて来られた事があります。)から、「誰か羯南と新聞日本の研究というのをやりませんか」との示唆を受けた青木彰氏の、筑波大教授時代のゼミ青木塾の教え子の集まりの由です。高木氏は銀行員ですが、メンバー中にはメディア関係者も多くしかし何れも働き盛りの人達故時間的制約から、活動はインターネット中心に行われている如くです。(http://katsunan.exblog.jp/)

こういう形で、羯南に対する関心が一部の学者の方々丈のものではなく、裾野広く伝承されていく姿に感動を覚えました。今後の羯南研究の更なる発展の為に、今回の節目を機に青森・弘前に保存されている諸資料を、国会図書館並と迄はいかないにせよ項目丈でもインターネットで検索出来る様なシステムの構築が出来ないものだろうか、と思わずにはいられません。是非共関係者の方々には

御検討頂きたいと存じます。

今回の一連の記念行事を企画・実行された青森・弘前両市及び県の関係者の方々、それを支えられた郷土研究者を始めとする学者・教育者の方々(※)更には東奥日報社(行方記者)・毎日新聞社青森支局(野宮記者) 陸奥日報社(石岡記者) 青森テレビ等のメディアの皆様、とりわけ直接お世話になった近代文学館の黒岩館長、榎引室長、郷土文学館の井上先生に、心よりの感謝の気持ちを捧げて、この拙文の結びといたします。

(※)青森・弘前で記念講演された大阪成蹊短大和田克司教授は、父君茂樹教授(初代子規博物館長)と二代に亘り子規研究の本邦での第一人者であり、京大生時代から父君と共に葉山の祖母を度々訪ねられていた方です。

(もがみよしお・陸羯南曾孫)



特別展「陸羯南と正岡子規」展示風景

# 陸羯南と笹森儀助

松田修一

曲がりなりにも弘前で高校時代を過ごし「名山名士を出だす」の詩を幾度となく耳にして育った身としては、陸羯南を理解しようとしたことも二度や三度ではない。だが、試みはことごとく挫折した。漢文読み下し調の文体に不慣れであることや、その思想が高邁であるという以前に、多くの羯南評に「国粹主義」といった文言を認めるにつけ無意識に理解の道を閉ざしてきたように思う。一種のアレルギー反応といつてよい。そのアレルギー反応からひよんなことで解放された。東奥日報紙の連載『笹森儀助 風霜録』を平成十八年末までの二年半近くにわたり担当したことである。儀助の中に、羯南との思いもよらぬ共鳴を見つけ、彼らの思想が現代的解釈でいうところの「国権主義」「国粹主義」とは著しく違っていることを、初めて実感したのだった。

同じ弘前・在府町生まれではあるが、二人は全く違うライフスタイルを生きた。羯南は、ごく短期間、北海道紋釧の製糖所に勤めたり、翻訳を業としたり、太政官文書局の官吏だった時期はあるものの、羯南が最も羯南であったのは間違いなく新聞記者の時代である。片や儀助は、県庁の役人として下北の区長や中津軽郡郡長を務めたかと思えば、洋式牧場を開設し、次には千島列

島や南西諸島を探検し、奄美大島の島司になり、朝鮮半島に渡って東亜同文会の日本語学校長に就き、最後には第二代青森市長になった。変転極まりない。しかも常に自らの足で歩き、自らの目と耳で世の有様を確かめ、自ら事を為した。言論の羯南に対して、実践の儀助であった。

儀助は、羯南と同様に、保守・国権主義者のレッテルを張られてきた。しかし、儀助の有名な著『南島探検』を客観的に読んでみて、いきなり大きな疑問に突き当たった。彼は生死ぎりぎりの生活にあえぐ沖縄島民を目にし、人頭税とマラリアの二重苦を放置する悪政に諸悪の根源があると訴えたが、彼が国権主義者であるならばなぜ島民に限りない慈愛のまなざしを向けることができたのか。内相井上馨の委嘱で行きながら、なぜ明治政府の沖縄政策を歯に衣着せず糾弾できたのか。その疑問を解くには、儀助の足跡を一から洗いなおすしかない。その結果、彼の民権的な側面は、実は生涯一貫したものであることが分かった。例えば、下北の区長を務めた際には、国や県に先駆けて一般民選を導入したり、慣習法という西洋の法概念を持ち出してヒバ山の国有林化に反対したり、減税のために県会をボイコットしたりした。儀助自身が「奉務中ノ苦心、唯民権保護ノ一点に止マル」と述べているほど徹底して民権派だったのだ。奄美の島司時代もし

かり。黒糖の暴利を貪り島民を搾取する鹿兒島商人と対峙し、ついには辞任に追い込まれた。

しかし一方で儀助は、明治十四年のいわゆる「弘前事件」において、菊池九郎、本多庸一ら県内自由民権派との大同団結を拒否して郡長を辞職し、中央政府を巻き込んだ一大騒動を巻き起こした。軍備を重要視し、天皇を崇拜した。どうも二面性がつきまとうのだ。

そこで思い当たったのは、羯南の「国民主義」にも二面性があるように見えることだった。国家の主体は「国民」だと定義しながら、日本という国家には天皇が必要だとするその主張は、一本の軸の上にはないように思えてならなかったのである。

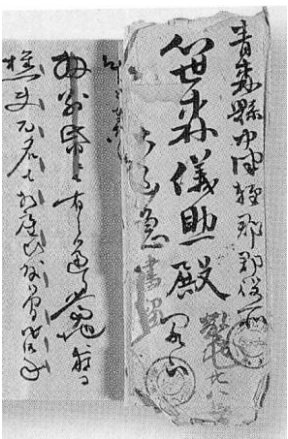
無論、それは当方の理解不足によるものだった。ある日、青山学院大学の小林和幸教授から、貴族院議員ら羯南人脈の人々に「国利」と「民福」の両立を希求する一団がいたことをご教示いただいた。そう指摘してみると、開国によって突然に国際社会へ放り込まれた新生日本に必要なものは、国権の強化、国民福祉の増進のどちらか一つではなかったことが納得できる。羯南は、政権を奪おうとして党利党略に明け暮れる民権を「偽民権」と看破したが、それは羯南が、「民福」なき「国家」は無意味であり、逆に「民福」のためには「国家」の伸展が必要だと考えていたからである。そこにおいて民権と国権は一体不可分のものとなり、日本国の発展のため

に日本国民の結節点としての天皇が不可欠なのである。

同様に、儀助も、国民不在の政争に明け暮れる初期国会を連日傍聴し、極度の政治屋嫌いになった。それがために、彼は自らの耳目と足でこの国の実態を見極めようとし、実践に生きる道を選んだのだった。

そうした思想的共鳴があつてこそ、二人は固い絆で結ばれていた。具体的に挙げればそれだけで紙幅が尽きるので割愛するが、公私にわたる親交は生涯続く。儀助は十二歳年下の羯南を思想的な師と仰ぎ、こそぞというときにはほとんど例外なく羯南に助言を求めた。羯南は、何事も恐れず、超人的な意志力で難事を実行に移す儀助を信頼し、ときに頼った。言論の羯南と、実践の儀助は表裏一体。互いに足りないものを補い合ったといえる。それゆえに、とことん具体的なものにしたきた儀助を鏡にして見れば、羯南の高邁な思想が、にわかには実体をもって立ち上がってくるのではないか。連載『笹森儀助 風霜録』を振り返って、そんな思いを強くしている。

(まつだしゅういち・東奥日報社編集委員)



陸羯南書簡(笹森儀助宛)封筒ならびに冒頭

### 新収蔵資料紹介 残月帖

#### 一 残月帖

「残月帖」は、明治四十三年から十四年にかけて、青森県板柳村の歌人・安田秀次郎に寄せられた書簡九通の合装卷子仕立て一巻である。

差出人と日付を以下に示すが、日本近代文学成初期の名だたる文人の名が並ぶ。(長谷川柳子は二葉亭四迷夫人。釈宗演は禅宗の高僧。夏目漱石は宗演のもとでの参禅体験を小説「門」に結実させている。)

- 永井莊吉(荷風) 明治43年10月29日
- 徳富健次郎(蘆花) 明治43年11月3日
- 長谷川柳子 明治43年11月5日
- 与謝野 寛 明治43年11月21日
- 幸田成行(露伴) 明治43年11月24日
- 与謝野晶子 明治43年12月5日
- 釈宗演 明治43年12月8日
- 夏目金之助(漱石) 明治44年3月16日
- 上田 敏 明治44年7月1日

書簡の受取人・安田秀次郎(一八七八〜一九二六)は、明治十一年一月二十五日に現在の板柳町に生まれ、東京専門学校(のちの早稲田大学)を卒業後、郷里でりんご園を営みながら短歌の道を志し蛇莓と号した。中央誌の「明星」「心の花」などにも歌を投稿、大塚甲山の「本県の三歌人」(明治四十

年六月二十一日・東奥日報)にもとりあげられている。本県歌壇の先駆者の一人であったが一冊の歌集も残さず、大正十五年七月十二日、四十八年の生涯を終える。与謝野寛はその死を悼み、「天寿にあらざる死は悲しく候」と書簡(大正十五年七月二十七日・坂本元太郎宛)に書き記している。

#### 二 徳富健次郎(蘆花) 書簡

「残月帖」所収の書簡は、安田から文人たちへの揮毫依頼・林檎贈呈などに対する返信・礼状の類が多いが、徳富健次郎(蘆花)の書簡は、蘆花が実際に安田宅を訪問したことをふまえた内容となっている。

明治四十四年一月、幸徳秋水らが大逆事件で処刑され知識人たちが口を閉ざす中、蘆花が公然と死刑執行に異を唱えたことは知られている。「桂侯爵へ」、「天皇陛下に願ひ奉る」、「謀反論」…蘆花が安田宅を訪ねたのは、その前年(明治四十三年)の十月六日のことである。夫人と養女を連れた北海道旅行の帰途、板柳村の安田宅を訪ねた蘆花は、翌日弘前公園を慌ただしく見物し帰郷の途についている。蘆花はそのことを随筆「津軽」(『みみずのたはこと』所収)に書いているが、「残月帖」に収められた蘆花書簡は、その交遊を伝えるものである。『蘆花全集』全二十巻(蘆花全集刊行会)、『徳富蘆花集』全二十巻/別巻(日本図書センター)に未収録。

徳富健次郎(蘆花) 書簡

明治四十三年十一月三日

帰来手前にかまけて失礼のみ致申候。

度々の御たより殊に過日の御念書により、小生はこゝに初めて貴兄の闊歴を審にし、年来貴兄について想像せし事共又先頃其一斑を覗ひし貴兄の周囲について推測せし事共も、彼御手紙により分明显す可き鍵を与へられ、貴兄の内なる人と面々相對するの機会を得たる悦難禁も有之候。それ等の事共々申上げんと存候程に重ねて御たよりに接し、御札やら御詫やら一緒に候。写真は大小何れも些のイタミなし。弘前の彼朝のあはたゞしかりしさまや可笑し。四人のさり気なき顔が可笑しく候。太郎君面目躍如、眉宇の間に不穩のものあり。まさに阿爺当年の神を伝へ居候かと覺しく候。程なく老の光を見る可き小さき眼は何をか語る。御内室様に随分御大切になさる様御伝声奉願候。味噌は直ぐ豆腐汁をつくり候。鹹けれど味よく候。豆に甘味を含む多き故かと被存候。家内より宣敷御札申上候。鶴子もひとり遊びの伴侶を得て大悦致居申候。林檎は多きを要せず小包にて御送り下され候はゞ尤も幸に候。紅葉一片津軽の秋も暮近く想はれ候。武蔵野にまだ霜は置かず紅葉はヌルデのみあかし。富士は何時の間にか真白に候。農家は麦蒔き最中、小生も老翁相手に大小麦二反ばかり蒔き候。兎角雨勝にて困り候。今日は天長節雨に候。来鳥無く土いたづら出来ぬ機会に近來杵の如く重き筆とりて一寸御札まで。

十一月三日正午

徳富健次郎

押

安田秀次郎様

几下 (句読点は翻刻者)

〔封筒〕

東京府北多摩郡

千歳村

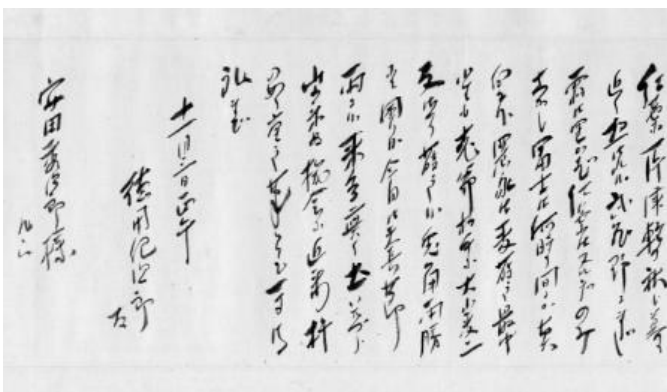
徳富健次郎

青森縣北津軽郡板柳村

安田秀次郎様

親披

資料解説、書簡翻刻  
榎引洋一(青森県近代文学館室長)



残月帖より徳富蘆花書簡(安田秀次郎宛)

# 資料寄贈者紹介

次の方々から資料を寄贈していただきました。ありがとうございました。今後とも当館へのご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

平成二十年二月二十九日現在

## 図書・資料受け入れ報告

平成十九年三月～二十年二月

- あえるクリエイティブ [Takra] Vol.20
- 青木恵美子『句集 玩具』
- 青森県歌人懇話会『青森県歌集 第50集』
- 青森県観光物産館アスパム『青森県観光物産館アスパム開館20周年記念』
- 青森県教育庁文化財保護課『あおもりの縄文―縄文遺跡群を世界文化遺産に―』三冊
- 青森県現代俳句協会『青森県現代俳句年鑑 2007年版』二冊
- 青森県詩人連盟『県詩連詩集 岬 二〇〇七年版』他一冊
- 青森県児童文学研究会『まゆのみかんの海 青森県年刊童話集6』二冊
- 青森県新幹線交流推進課『あおもり教育旅行ガイドブック 2007』二冊
- 青森県長寿社会振興センター『青森県高齢者総合相談センターのあゆみ』二冊
- 青森県俳句懇話会『新青森県句集 第十八集』
- 青森県文芸協会『二行詩集 季節』他図書・雑誌百二十冊
- 青森県立郷土館『よみがえれ北前船 北国の海運と船展』他三冊
- 青森市市民文化生涯学習課 市史編さん室『新青森市史 資料編5 近世(3)』
- あおもり草子編集部『あおもり草子』通巻一七七号 他六冊
- 秋元守信『歌集 白神の水』
- 旭川西川徹郎文学館『無灯艦隊―十代作品集』
- あしかげ社『蘆光 第59巻第1号 他五

- 阿部誠也『青森の文学その舞台を歩く (上)』
- 阿部忠俊『阿部忠俊詩集 試誘』
- 阿部次男『むろぞく』創刊号 他図書・雑誌二十三冊
- 尼崎市総合文化センター『第62回尼崎市文芸祭 文芸作品集』
- 新谷博『句集 青い森』他三冊
- 石黒英一『詩集 道しるべ』
- 石沢晋一『句集 樹水』他図書・雑誌百四十九冊
- 石田正一『週刊読売』第18巻第19号 他図書・雑誌二冊
- 石村柳三『石村柳三詩集 晩秋雨』他一冊
- 市川市文学プラザ『市川市文学館基本構想』他二冊
- 一茶記念館『小林一茶百八十一回忌全国俳句大会作品集』
- 稲垣道一『航跡』第17号 他図書・特殊資料二点
- 井上靖記念文化財団『伝書鳩』第8号
- いわき市立草野心平記念文学館『みんなあつまれ紙芝居』他二冊
- 内山孤遊『川柳色紙一点』
- 江刺家均『稿本 小井川潤次郎遺文 第三篇 潮鳴集』
- NPO日本産業翻訳協会『パリの酒場・リヴィエール』
- 遠名晶子『句集 かく生きて』二冊
- 遠藤加奈子『歌集 水無月の風』
- 大泉光一『支倉常長』他図書・特殊資料八点
- 大口公恵『露の力』の世界』
- 大阪国際児童文学館『第23回ニッサン童話と絵本のグランプリ 創作童話・絵本入賞作品』
- 大塚正一『川柳作品集 宙』川柳色紙一点
- 奥崎倭子『川柳色紙一点』
- 小野五郎『川柳色紙一点』
- 角田古雄『川柳色紙一点』
- かごしま近代文学館『向田邦子』思い出トランプ』の世界』リーフレット
- 「風花随筆文学賞」実行委員会事務局『第10回風花随筆文学賞入賞作品集』
- 神奈川近代文学館『無限大の宇宙―埴谷

- 雄高『死霊』展』
- 神奈川文学振興会『滑川道夫文庫目録―1 (特別資料・雑誌)』他一冊
- かなぎ元気倶楽部『土地の記憶 まちの記憶 六月十九日』
- 河北文化事業団『第56回 平成18年度河北文化賞』
- 鎌倉文学館『中原中也 詩に生きて』他一冊
- 鎌田紳爾『北奥氣圏』第三號 二冊
- 鎌田春江『鎌田祐嗣遺句集 類かむり』
- 川内まごころ文学館『薩摩川内の文芸―郷土を彩る14人―』
- 菊池寛記念館『秋風遍路―四国路の与謝野寛・晶子―』他雑誌一冊
- 北九州市立松本清張記念館『松本清張と松川事件』他二冊
- 北国翔子『子どもにおくることば』他図書・雑誌・特殊資料二十三点
- 北沢はまお『川柳色紙一点』
- 北嶋一夫『統計調査員余話』
- 北野岸柳『川柳色紙一点』
- 北の街社『世も幻の花ならん 今官一と太宰治・私版曼茶羅』他三冊
- 木村木念『みちのく』他図書・雑誌三八点
- 旧制弘前高等学校 北溟会『大鵬の群像―旧制弘前高等学校―』
- 陸羯南生誕百五十年没後百年記念事業実行委員会『陸羯南の津軽』他図書・特殊資料五十五点
- 草野力丸『成田千空序文』
- 久慈さみ代『寺山修司俳句(素材)と短歌(物語性)の関係』他二冊
- 九津礼多加夫『あべら文学新聞』No.1
- 工藤キミエ『歌集 薔薇を抱く』二冊
- 工藤邦男『歌集 宇宙基地』二冊
- 工藤青夏『川柳色紙一点』
- 工藤ちよ『虚構なき墓標』
- 工藤正廣『建部綾足句軸』
- 黒田佳子『夜の鳥たち』
- 群馬県立土屋文明記念文学館『今日も赤城が見える』他二冊
- こおりやま文学の森資料館『中山義秀展』
- 古河文学館『佐江衆一展』
- 国際芸術センター青森 AIR 実行委員会

- ―「SUSPENDED 浮景」他一冊
- 国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター『平成18年度 博物館に関する基礎資料』
- 国立歴史民俗博物館『れきはくにいこうよ 2003』他二冊
- 小諸市教育委員会『第十三回 小諸・藤村文学賞 入選作品集』
- 財界研究所『財界』第55巻第16号
- さいたま文学館『鉄道のある情景』他二冊
- 斎藤早苗『川柳色紙一点』
- 斎藤三千政『青森県ゆかりの文学』
- 坂の上の雲ミュージアム『坂の上の雲ミュージアム通信 小日本』2007年冬号
- 坂本勝子『川柳色紙一点』
- 佐々木高雄『詩集 風の歌』他一冊
- さざき蓬石『川柳色紙一点』
- 佐々木靖章『日光』第2巻第1号 他図書・雑誌二十三冊
- 笹田かなえ『川柳色紙一点 斎藤照子』追憶』二冊
- 佐藤幸子『村本督脚本集』
- 佐藤暹『詩集 尻屋崎』
- 佐藤勇治『工藤卓爾伝』他図書・雑誌三冊
- シード書房『考証 子規と松山』
- 子規庵『糸瓜咲て』他図書・特殊資料二点
- 子規庵保存会『子規はて知らずの記(草稿)―付―はて知らずの記』
- 滋野さち『川柳色紙一点』
- 渋柿園俳句会『渋柿園 合同句集』
- 清水義和『寺山修司研究 Vol.1』他一冊
- 下関短期大学『下関短期大学紀要』第26号
- 昭和館『永遠に伝えたい記憶』パンフレット 他図書一冊、パンフレット十二部
- 書肆 青樹社『詩と創造』61 (2007 秋季号) 他一冊
- 白戸邦子『歌集 轉りながら』
- 新宿歴史博物館『新宿ゆかりの文学者』
- 新俳句人連盟『新俳句人連盟機関誌「俳句人」の六〇年』
- 杉並区立郷土博物館『石黒敬七展』他三冊
- 関楚艸太郎『川柳色紙一点』

- 全国俳句山寺大会実行委員会『第50回 全国俳句山寺大会兼題投句集』
- 仙台文学館『人間・芥川龍之介―やさしかった、かなしかった・・・』
- 川柳ゼミ『青い実の会』『たわわ』
- 川柳塔みちのく『今愁女百句集 雪ぼとけ』三冊
- 創童舎『白い国の詩』通巻599号 二冊
- 外海吟社『あじがさわふるさと散歩雑記帳』二冊
- 高木宏治『司馬遼太郎からの手紙(下)』
- 高田寄生木―五十嵐さか江色紙他三冊
- 高橋けん―川柳色紙一点
- 高橋永己―『句集 林檎の里』二冊
- 田鎖晴天―川柳色紙一点
- 竹浪和夫―『俳人・畑中秋穂伝』他図書・雑誌六冊
- 竹鼻瑠璃男―『白打罵多の記』
- 田辺欽二郎―『谷崎潤一郎全集 第一巻』他図書・雑誌百十三冊
- 丹青社『Tansai.net No.28 文化文化デジタル化推進協議会―「地域文化資産ポータル」Vol.1 他一冊
- 千葉育子―『詩集 鏡の向こう』
- 調布市武者小路実篤記念館―『日日是好日』雑誌「心」に集う人々』パンフレット 他一冊
- 汐文社―『昭和のくらしと文化』
- 対馬敏子―『句集 冬渚』
- 對馬義一『大館市及びその周辺地域の風土、文化等調査研究報告書 大館市』別刷 大館出身の希有な文学者・平田小六の生涯』他図書二十四冊
- 土田雅子―川柳色紙一点
- 寺本躬久―『草莽の賦』
- 東奥日報社『"FOO Life" 第5号 他十一冊
- 東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター『山形市内仏像詳細調査報告書』他一冊
- 東北産業活性化センター『地域の文化資本』
- 福島県立文学書道館『寂聴なつかしき人展II』他一冊
- 仲嶺眞武『四行詩集 時間が牛になって草を食べている』
- 成田千空『句集 十方吟』
- 成田本店―『図書』「波」各十二冊「青春と読書」十三冊 計二十七冊
- 新山風太郎―川柳色紙一点
- 西塚保遠―『詩集 昼月』
- 成田チセ―川柳色紙一点
- 仁科源一―『扇ヶ浦物語』他図書・雑誌・特殊資料六十四冊
- 西原艶子―『川柳自選句集 エプロンの詩』
- 西村俊一―『越境としての古代5』他雑誌一冊
- 日本英米詩歌学会『ジャパン・ポエトリ―レヴュー』第13号
- 日本近代文学館『日本近代文学館年誌 資料探索3』他一冊
- 日本現代詩歌文学館『温泉と詩歌 東北地方篇』
- 野沢省悟―『句集 新子』他特殊資料四冊
- 波多野祥二―『波多野五葉庵句集 われも旅ゆく一人なり』
- 新美南吉記念館『第十九回新美南吉童話賞入選作品集 赤いろうそく』
- 八戸むさし―川柳色紙一点
- 姫路文学館『新美南吉 こんぎつねの世界』他一冊
- 兵庫県立美術館『ネットミュージアム兵庫文学館 広報用ダイジェスト版CD』
- 平賀町読書運動推進協議会『平賀町読書運動推進協議会28年のあゆみ「道は一人のみ」』
- 平山栄蔵―『良寛のこと』
- 弘前詩塾―『弘前詩塾』第9号
- フリーラーステーション『ふいぐらあ』第17巻第2号 他一冊
- 風塵社―『風塵』10号 二冊
- 福井次郎―『戦争映画』が教えてくれる現代史の読み方』
- 福岡市文学館『吉岡禅寺洞と「天の川」』
- 福土光生―『きじ鳩』通巻138号 他三冊
- 福土修二―『第17回青森県民文化祭芸芸コンクール入選作品集17』
- 福土慕情―川柳色紙一点
- ふくやま文学館『島田荘司展II―ミステリーとは、限りなく脳の小説である』他一冊
- 藤枝市文学館『小川国夫文学展「アポロンの島」から50年』
- 藤一也―『藤一也自筆自選百詩集』
- 藤川富久―『歌集 厨の春秋』他図書・雑誌六十八冊
- 藤寿々夢―『羯南夢現』二冊
- 藤田晴央―『孔雀船』69号 他五冊
- 藤原孝子―『句集 六月の少女』二冊
- 古川智映子―『氷雪の碑』他一冊
- 文化財虫害研究所『文化財の虫歯害』第54号 他特殊資料一点
- 文藝軌道の会―『文藝軌道』第4巻第2号
- 平凡社『別冊太陽 司馬遼太郎 新しい日本 発見』
- 北網園北見文化センター『N.P. Blood 21 Vol.2 首藤晃展』パンフレット 二冊
- 星野富一郎―『歴史読本』第12巻第7号 他一冊
- 北海道立文学館『人生を奏でる二人組 デュオ』他図書・特殊資料十冊
- 前橋市『若い芽のポエム』
- 前田和夫 淡谷悠蔵原稿他三冊
- 前田まえてる―川柳色紙一点
- 前橋文学館『松本圭―LET'S GET LOST』他一冊
- 松尾正輔『すみっこの花 教護院の記録』他一冊
- 松平皓―『蓑笠亭・愚庵・古道人研究』通巻第十四号
- 松山市立子規記念博物館『子規と鉄幹・晶子』近代短歌の黎明』
- 圓子哲雄―『四行詩集 流離』
- 三上強二―『黒豹コリラ』他十冊
- 岬の分教場保存会―『第五回二十四の瞳 岬文壇エッセー 受賞者作品集』
- 三島市教育委員会 文化振興課『太宰治が三島の街を愛した理由』『夏の思い出』太宰日記』五冊
- 未津きみ―『詩集 幻の川 幻の樹』
- 密造者の会―『密造者』第70集
- 南地方学校図書協議会―『読書感想文文集 心の目』第49号』
- 南渡蒜―『詩集 望郷』
- 宮沢邦子―川柳色紙一点
- 作品集』
- 大坂国際児童文学館『第16回感想文入賞作品集』
- 村上秋善―川柳色紙一点
- 山形龍生―『秋田雨雀の詩・短歌・俳句 秋田雨雀日記より』
- 山中達、陽子―『最後の仕事は二人で』
- 山梨県立文学館『高村光太郎 いのちと愛の軌跡』他一冊
- 山谷久子―『詩集 青いカマキリ』二冊
- 矢本大雪―川柳色紙一点
- 与謝野晶子文芸館『与謝野晶子と京都』
- 吉井勇記念館『第五回 吉井勇顕彰短歌大会作品集』
- 吉田健治―川柳色紙一点
- 吉田久美子―川柳色紙一点
- 路上社『わが日わが夢(日英セット)』
- ワーズ制作所『マップブルマガジン 青森十和田・八甲田・津軽2008』
- 渡邊兼敏『歌集 地底』他二冊
- 山梨県立文学館『高村光太郎 いのちと愛の軌跡』他一冊
- 山谷久子『詩集 青いカマキリ』二冊
- 矢本大雪『川柳色紙一点』
- 与謝野晶子文芸館『与謝野晶子と京都』
- 吉井勇記念館『第五回 吉井勇顕彰短歌大会作品集』
- 吉田健治『川柳色紙一点』
- 吉田久美子『川柳色紙一点』
- 路上社『わが日わが夢(日英セット)』
- ワーズ制作所『マップブルマガジン 青森十和田・八甲田・津軽2008』
- 渡邊兼敏『歌集 地底』他二冊

定期刊行物(平成十九年度分)

- アートブロー『月刊ぶれいがいど東北』
- 青嶺俳句会『青嶺』
- 青森アララギ会『青森アララギ』
- 青森県環境生活部県民生活文化課 県史編さんグループ『青森県史だより』
- 青森県教育厚生会『三潮』
- 青森県郷土作家研究会『郷土作家研究』
- 青森県児童文学研究会『ずぐり』
- 青森県長寿社会振興センター『あおもり長寿セミナー』「あすなる倶楽部」
- 青森県文芸協会『文芸あおもり』
- 青森県歩道短歌会事務局『歌誌「北潮」』
- 青森古今短歌会事務局『歌誌「青森古今」』
- 青森美術音楽鑑賞会『A B O K』
- 青森文学会『青森文学』
- 尼崎芸術文化協会『芸文あまがさき』
- 新谷博『雪天』
- 石川近代文学館『鏡花研究』
- 泉短歌会『歌誌「泉」』
- 伊藤一郎『明治大正俳句雑誌レポート』
- 岩崎守秀『阿字』
- 岩手郷土文学研究会『岩手郷土文学の研究』
- 大阪国際児童文学館『国際児童文学館紀要』
- 大佛次郎記念館『おさらぎ選書』
- 鬼發行所『鬼』
- 小山正見『感泣亭秋報』
- 海光發行所『詩誌「海光」』
- 飾画の会『飾画』

- 風詩社―詩誌「風」
- 金沢文化振興財団―「研究紀要」
- 川内俳句会―「ひこばえ」
- 北の会―「きたのやかた」
- 北の街社―「北の街」
- 国原社―歌誌「国原」
- 黒艦隊―俳誌「黒艦隊」
- 蕪風発行所―俳誌「蕪風」
- 群馬県立土屋文明記念文学館―「風」文学紀要2007
- 群緑短歌会―「群緑」
- 勁草社―「勁草」
- 月刊弘前編集室―「月刊弘前」
- 現代文学史研究所―「現代文学史研究」
- 越谷市立図書館 野口富士男文庫―「野口富士男文庫」
- さいたま文学館―「文芸埼玉」
- 榊弘子―文藝冊子「木綿」
- 湖社―詩誌「湖」
- 此岸俳句会―俳誌「此岸」
- シムノ―「Fishing Gate」
- 紫明の会―「紫明」
- 渋柿園俳句会―俳誌「渋柿園」
- 樹氷群発行所―俳誌「樹氷群」
- 昭和館―「昭和のくらし研究」
- 書肆 北奥舎―「北奥風園」
- 新現代詩の会―「新現代詩」
- 真朱の会―「真朱」
- 川柳触光舎―「触光」
- 川柳ゼミ「青い実の会」―「青い実の会」
- 川柳塔みちのく―川柳誌「川柳塔みちのく」
- 川柳ひらなひ吟社―川柳誌「川柳ひらなひ」
- 外海吟社―「外海」
- 高田寄生木―川柳誌「北貌」
- たかなな発行所―俳誌「たかなな」
- 丹青研究所―「ミュージアム・データ」
- 千田和美―川柳誌「風紋」
- 潮音社―「潮音」
- 調布市武者小路実篤記念館―解説シート「もつと知りたい武者小路実篤」
- 東京都江戸東京博物館―「東京都江戸東京博物館研究報告」
- 胸乱詩社―詩誌「胸乱」
- 徳島県立文学書道館―「文芸とくしま」
- 徳島県立文学書道館研究紀要 水脈」

- 豊巻つくし―川柳誌「うまつこ」
- 十和田かばちえつぼ川柳吟社―「川柳かばちえつぼ」
- 十和田文化新聞社―人間情報紙「夢見る人」(夢道人)
- 波詩社―「波」
- 新美南吉記念館―「研究紀要」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘前民主文学」
- 梅光学院大学―「梅光文芸」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- 波止場の会―「波止場」
- はまなす発行所―「はまなす」
- 萬緑青森県支部―俳誌「未来」
- 萬緑発行所―「萬緑」
- 姫路文学館―「姫路文学館紀要」
- ひら川吟社―俳誌「ひら川」
- 平野敏―「平野敏詩誌 魚信旗」
- 弘前川柳社―川柳誌「川柳林檎」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前潮音会―短歌誌「すべーす」
- 弘前文芸協会―「文芸弘前」
- 弘前ペンクラブ事務局―「弘前ペンクラブ ニュース」
- 福井愛―詩誌「くうき」
- 福井―「ム」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- 藤田勇三郎―「東(ひんがし)」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文化環境研究所―「Cultivate」
- 文団・遙―「遙」
- 北狄社―「北狄」
- 本郷七日会―俳誌「地塩」
- 松丘保養園慰安会―「甲田の裾」
- 湊川神社社務所―「湊川」
- 椋鳩十文学記念館―「紀要」
- 無名群社―「無名群」
- 「群山」青森短歌会―「朔天」
- 明治大学学芸員養成課程―「紀要」
- 「MUSEUM STUDY」
- 安田保民―「個」
- 山田尚―「亜土 第二次」
- 山梨県立文学館―「紀要 資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 楳俳句会―「楳」
- 吉田健治―「短詩サロン」

- 若菜の会―「若菜」
- 《館報》
- 青森県総合社会教育センター―「所報響」
  - 尼崎芸術文化協会―「芸文だより」
  - 石川近代文学館―「石川近代文学館ニュース」
  - 石坂洋次郎文学記念館―「石坂洋次郎文学記念館新聞」
  - 一茶記念館―「一茶記念館だより」
  - 井上靖記念館―「井上靖記念館報」
  - いわき市立草野心平記念文学館―「いわき市立草野心平記念文学館報」
  - 岩手県立埋蔵文化財センター―「わらびて」
  - 大阪国際児童文学館―「国際児童文学館 REPORT」
  - 大原富枝研究会―「山査子」
  - かごしま近代文学館かごしまメルヘン館―「かごしま近代文学館・メルヘン館報」
  - 「年報」(平成18年度)
  - 「神奈川近代文学振興会」(「神奈川近代文学館」)
  - 「神奈川近代文学館年報2006年(平成18年)度」
  - 軽井沢高原文庫―「軽井沢高原文庫通信」
  - 北九州市立松本清張記念館―「松本清張記念館報」(「友の会だより」)
  - 虚子記念文学館―「虚子記念文学館報」
  - 熊本近代文学館―「熊本近代文学館報」
  - 高知県立文学館―「高知県立文学館ニュース 藤並の森」
  - こおりやま文学の森資料館―「こおりやま文学の森通信」
  - コクヨファニーチャー―ミュージアムレポート「テオリア」
  - さいたま文学館―「さいたま文学館だより」(「館報」)
  - 埼玉文芸家集団―「埼玉文芸家集団 会報」
  - 佐藤春夫記念館―「佐藤春夫記念館だより」
  - 滋賀県立近代美術館―「美術館ニュース フラミンゴ」
  - 昭和館―「昭和館報」
  - 杉並区立郷土博物館―「杉並区立郷土博物館だより 炉辺閑話」

- 世田谷文学館―「世田谷文学館ニュース」
- 全国文学館協議会事務局―「全国文学館協議会会報」
- 仙台文学館―「仙台文学館ニュース」(「仙台文学館年報」)
- 台東区立中央図書館 池波正太郎記念文庫―「池波正太郎記念文庫報」
- 鷹山宇一記念美術館友の会―「七戸町立鷹山宇一記念美術館友の会会報」
- 立原道造記念館―「立原道造記念館」
- 調布市武者小路実篤記念館―「館報 美愛真」
- 東京都江戸東京博物館―「江戸東京博物館 NEWS」
- 藤村記念館―「藤村記念館だより」
- 東北大学史料館―「東北大学史料館だより」
- 東北大学総合学術博物館―「ニュースレタ― Omnividentia」
- 徳島県立文学書道館―「徳島県立文学書道館ニュース」(「のは」)
- 十和田市立新渡戸記念館―「十和田市立新渡戸記念館だより」
- 中原中也記念館―「中原中也記念館報」
- 新潟県立歴史博物館―「総合情報誌 博物館だより」(「年報」(平成18年度))
- 日本近代文学館―「日本近代文学館」
- 日本現代詩歌文学館―「日本現代詩歌文学館報 詩歌の森」
- 日本新聞教育文化財団―「NIE ニュース」(「ニュースパークだより」)
- 日本ユネスコ協会連盟―「世界遺産年報2006」
- 俳人協会―「俳句文学館」
- 原阿佐緒記念館―「原阿佐緒記念館だより」
- 姫路文学館―「手帖 姫路文学館」(「文のしずく」)
- 「姫路文学館年報(平成18年度)」
- 弘前市立郷土文学館―「北の文脈 ニュース」
- 福岡市文学館―「文学館倶楽部」
- 文化環境研究所―「文環研レポート」
- 北海道立文学館―「北海道文学館報」(「平成17年度年報」)
- 前橋文学館―「前橋文学館報」
- 松山市立子規記念博物館―「子規博だより」(「松山市立子規記念博物館年報」)



○三浦綾子記念文学館―「みほんりん三浦綾子記念文学館館報」  
 ○室蘭文学館の会―「むろらん港の文学館通信」  
 ○明治大学学芸員養成課程―「年報 MUSEOLOGIST」  
 ○盛岡てがみ館―「平成 18 年度 盛岡てがみ館館報」  
 ○山梨県立文学館―「山梨県立文学館館報」  
 ○山梨県立文学館年報」  
 ○吉川英治記念館―「草思堂だより」  
 (敬称略)

平成 19 年度企画展開催報告

企画展「青森県近代文学館所蔵作家の手紙展」

企画展「青森県近代文学館所蔵作家の手紙展」を、四月二十八日から六月十日までの会期で開催しました。

明治四十三年から四十四年にかけて、永井荷風・幸田露伴・夏目漱石ら名だたる文人から青森県板柳村の歌人・安田秀次郎に寄せられた書簡九通を合装した「残月帖」一巻(5面で紹介)をはじめ、島崎藤村・木下杢太郎・安倍能成・与謝野寛・森鷗外・石川啄木・長塚節・竹久夢二、そして、本県の佐藤紅緑・太宰治・石坂洋次郎・寺山修司・棟方志功ら著名な文人・画家の直筆書簡二十三点を展示しました。会期中、猿不次男氏の文章『作家の手紙展』に寄せてを、パネルで紹介し、五月二十七日には榎引洋一室長による日曜講座「安田秀次郎に寄せられた文豪たちの書簡」を行いました。

「作家の手紙展」に寄せて

猿不次男

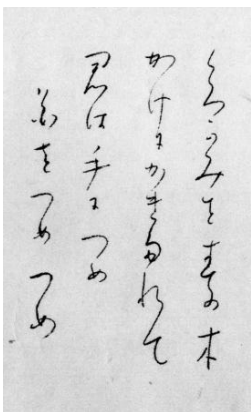
「作家の手紙と、活字になった作品」との関係は、ちょうど「スナップ写真」と、記念用の肖像写真」、或いは「日常の素顔の女性と、一分の隙なく化粧した女性」との関係に似ているような気がする。

活字の良さは、第一に読み易いことだろうか。作者の筆跡の上手下手に関係なく、内容を間違いない伝える手段として、活字は確かに毛筆やペンに優っている。それは誰も否定出来ないだろう。その上、作品として世に問うとなれば、作家は一字一句たりともおろそかにせず、その文章は十分な推敲を重ねたものになっているだろうから、まさに肖像写真や盛装した女の姿のように、非の打ち所の無いものを目指した文のはずである。勿論、活字となった作品からでも、その文体や内容から自然にじみ出るものがあるから、作家の人柄とか心ばえ、或いは、書いている時点の心境や思想などは、おおよそ推察出来ることもある。しかし、スナップ写真や日常の何気ない表情の中から、作家自身でさえ気づいていない心の奥に秘められているものが零れ出て、ふと現れてしまうように、やはり直筆の手紙からは、活字の作品からは決して読み取れない或る種の雰囲気とか、心情が伝わって来ることも疑えない。

今回展示されている手紙の中には、幸田露伴から安田秀次郎宛の手紙のように、尋ねられた事について、とり急ぎ答だけ、というものもあるが、それ以外はいずれも丁重で、実に心の籠もった文章が多く、さすが一流の作家と呼ばれる人達が、普段から如何に人に接し、どのような繊細な感情を抱いていたか、とか読み取る事が出来て、心打たれる思いがした。特に漱石ほどの文豪が、おそらく病氣入院中にお見舞いに贈って頂いた林檎に対しての礼状であろう。感謝の気持ちが目に見えるように描かれていることに目を見張ったし、与謝野鉄幹が安田秀次郎の他界に寄せて送った哀切極まりない手紙には、思わず涙を誘われた。また永井荷風の、自分の作品を読んでくれたことに対する素直な喜びの様子は、つい頬が緩んだ。そして数ある中で、とりわけ心に残ったのは、与謝野晶子の手紙である。女の子の名付けを頼んだ安田氏に伝えて、花樹という名を贈った上に、わざわざ「くろかみを春の木／かげにかきたれて／君は手につめ／花をつめつめ」と歌まで添えている繊細な心遣い、彼女は歌人として才長けていただけではなく、非常に情豊かな女性だったことが窺えて、深い感動を覚えたからである。

ところで直筆の手紙の価値は、内容だけに留まらない。書かれた文字そのものが、作家自身の個性の発露と言えるからである。流れるように美しい文字は言うまでもないが、癖字で読み難いものでも、それはそれで魅惑するもの大きい。同じ人が書いた同じ文字でも、一つとして同じものはない。筆勢や運筆の遅速、墨やインクの濃淡は、微妙に揺れる作家の感情の動きを表している。墨継ぎやペンが止まった所で、作家は一体どんな表情をしていたのだろうか？ 姿勢は正座だろうか、それとも胡座かな？ 空いている片方の手は、頬杖でもしていたのかしら、頭か額に掌を当てていたのではありませんか？ などと想い描くと、際限なく空想が浮かんで尽きることがない。それにつけても、当時、これほどの一流作家達が、津軽地方の文人や知人と交流があったことに改めて驚嘆した。

一巡り、手紙の内容をお読みになったら、今一度、筆跡を楽しみ、作家の様子を思い浮かべながら、お廻りになってはいかがでしょう。心からお勧めしたい。(ばくふじお・作家)



与謝野晶子書簡(安田秀次郎宛の一部)

# 「生誕一一〇年—淡谷悠蔵展」に寄せて 三野 亜沙子

## 「野」の人

百年を生きるというのはどんな気持ちがあるのだろうか。それが「極端な時代」、「過剰殺戮の時代」ともいわれる二十世紀であれば、人はいくどの社会変化、価値の転換を生きなればならなかっただろう。防空壕の暗さを記憶の端にとどめているだけの者にとっては想像をはるかにこえている。

父は二つの世紀末に挟まれた百年を生きた。商家に生まれ、商人に学問はいらなしいと言われながら、本を愛した。人の顔に金儲けしか見ない商人の生活を嫌い、「自分を捨てるつもりで」新城の山に入っており、ご作りをはじめた。白樺派に心ひかれていた文学青年はやがて農民の過酷な現実を変えたいと願うようになり農民運動にかかわってゆく。運動へのかかわりが深くなるにつれ父の農園はやせ細って困窮は増していった。

農民運動が「赤」というレッテルを貼られ逼塞していく過程は日本が戦争になだれてゆく過程でもあった。

農民の惨状を打破しようにもその手だてとなるものは次々ともぎ取られてゆく。いつ検挙されるかわからず、それでもなお抗う方法はないかと模索する人達。

ぎりぎり締めつけられるような時代の空気が残された父の『日記』にかいま見ることが出来る。もはや、身動きもできない

状況のなかで父には「這いずり廻ってでも、生爪剥がす苦しみに耐えてでも、この戦争という時代を生き延びて、戦争の終りを見とどけよう」という執念が燃えていた（『海鳴り』）という。

そして敗戦、「バラバラにされ、死ぬ思いをさせられて来た人々」が集まって全国農民組合を結成しようとしていた。

占領政策がどんなものか、手探りの中であつたが、組合運動は息を吹き返そうとしていた。だが農民組合青森県連合会の会長となつた父は、敗戦の翌年六月公職追放となつた。東亜連盟に籍を置いたことがその理由だった。「嵐が荒れば嵐の中で、それなりに動けるだけは動こうとした。：それが結局は戦争に協力した形になつたというなら、それはそれで仕方がない（『海鳴り』）」、おなじ行動が戦時は「赤」と呼ばれ、戦後には「国家主義者・軍国主義者」と呼ばれることになつた。追放は一九五一年まで続いた。

追放解除となつた翌年、政党内閣を置いたことのなかつた父が社会党入党の勧めを承諾している。さらに翌々年には新しい歴史を開こうとする運動の熱気の中で、固辞していた選挙にも出馬をし、政治の道を選ぶことになつた。

商人から農民に、組合運動から政治へと歩む道筋の傍らには常に文学青年がいたように思う。山にこもってりんごを

作り鶏を飼い、本を読み文を書く、「若い日の夢をかけた仕事であり生活」であった。自伝的作品に『野の記録』と題した一人の農民の魂の軌跡を辿っていただけだと思ふ。

## 展示を終えて

入口のパネルに私は右記の文を書いた。今思えば傲慢な物言いにも思えてくる。「企画展」では私の知らなかつたこと、想像もしなかつたことが語られた。阿部誠也さんは私が父のそばにいて聞くことがなかつたことも略歴に書いてくださった。長いお付き合いをいただいた齋藤せつ子さんは「情熱の人」と父を評してくださり、私は父をそんな風に見たことはなかつたなあ、と不意を突かれた思いがしたのだ。展示期間中だけでなく、終わってから様々な感想や教示をいただいた。最初から最後まで不安一杯の私を叱咤激励してくださつた齋藤葵和子さんは、会場に置いたパンフレット「歌集」の発案者でもある。

展示資料は近代文学館だけでなく、様々な方が提供してくださつた。それらの資料が、わが家の書庫に雑然とあつた資料とともに整然と展示され、中にはこんなものが残っていたのかと驚くほど古い写真もあつた。写真には年の離れた兄と、その娘を乗せた乳母車に寄り添う

少年の頃の父がいた。私の知っている父からは想像もつかないほっそりとした少年だった。赤ん坊もまた淡谷のり子の面影を宿してはいない。父が鬱々と商人の道のとぼ口に立つた頃だろうか。戦前の雑誌には若い頃の父の文章が載っていて、雑誌全体に時代の切迫した空気が溢れていた。

日曜講座では文学館主幹の佐々木朋子さんが父の自伝的作品である『野の記録』を綿密に解説してくださつた。ただぼんやりとあるいは出来事の顛末を追って読んでいたものの奥に父の思いを汲み取る術を、私は教えていただいたのであつた。また、会場にいらした方から笑いのうちに父のエピソードが紹介されたこともあつた。大町桂月が蕨温泉に愛着をもつた理由について、父が桂月は宿のおかみさんに惚れていたのだと言つたという。意外に父はゴシップも好きだったのかもしれない。さまざまの方がそれぞれの「淡谷悠蔵」を教えてください。私にとってはじつに有難かつた。

父の生涯が幸せなものだったかどうかはわからないが、少なくとも人の胸の中に「私の淡谷悠蔵」を抱いてもらっている幸せには恵まれたのだと思つた。おそらくこの「企画展」もそのような方々の胸の萌芽から花開くことができたのだと感謝の気持ちでいっぱいである。

(みのあさこ・淡谷悠蔵長女)

□企画展「生誕一一〇年―淡谷悠蔵展」

企画展「生誕一一〇年―淡谷悠蔵展」を、十月十三日から十一月二十一日までの会期で開催しました。

淡谷悠蔵は青森市に生まれ、短歌雑誌「黎明」総合文芸誌「座標」を創刊して県内の文学活動に大きな影響を与えました。本展は、農民運動、社会主義運動、地方文学活動、政治家としての活動、と多岐にわたる九十八年間の生涯を通じて「苦学一生」の精神を貫き、自伝的長編小説『野の記録』をはじめ多くの著作を残した淡谷の生涯と業績を、生誕一一〇年という節目の年に概観したものです。代表作「野の記録」「海鳴り」の草稿、戦前から約四十五年間書き続けた日記、文人との交流を示す書簡や筆墨、愛用のルパンカなど、百五十三点の資料を展示しました。

開会式では、淡谷悠蔵の長女の三野亜沙子氏、生涯概説を執筆した「弘前民主文学」代表の阿部誠也氏をお迎えし、黒岩恭介文学館長と共にテープカットを行いました。

また関連行事として、十月二十八日・三野亜沙子氏「父・淡谷悠蔵のこと」、十一月四日・佐々木朋子主幹「淡谷悠蔵と『野の記録』」と二回の日曜講座を行いました。

展示終了後、三野亜沙子氏より淡谷悠蔵資料七百二十一点が当館に寄託されました。



淡谷悠蔵展開会式(テープカット) 左から阿部誠也氏、三野亜沙子氏、黒岩恭介文学館長

□企画展「青函連絡船終航二十周年展」

企画展「青函連絡船終航二十周年展を、平成二十年一月十九日から三月二十五日までの会期で開催しました。

昭和六十三年三月十三日の青函連絡船終航から二十年を記念して、文学館と県立図書館が共同で企画したものです。石川啄木『一握の砂』太宰治『思ひ出』三浦哲郎『白夜をめぐる人々』など、青函連絡船・津軽海峡を描いた文学作品を、連絡船の歴史と共に紹介し、青函連絡船「八甲田丸」の模型や終航の日の記念スタンプなども展示しました。

また、青森市の写真家、鎌田清衛氏・サトウユウジ氏による写真二十点を展示しました。黒煙をあげて走る昭和三十年代の連絡船や、最後の運航を見送る人々など、貴重な風景に来館者は熱心に見入り、思い出を語り合う場面も見られました。終航記念日の三月十三日には、鎌田氏・サトウ氏によるギャラリートークを開催しました。

注目の作家「小野正文・成田千空を偲んで」

二階展示ロビーに「小野正文を偲んで」「成田千空を偲んで」のコーナーを設けています。太宰治研究や本県文学の振興に大きな功績のあった小野正文(一九一三〜二〇〇七)と、中村草田男の精神を継承し北の地青森県で日本の俳壇をリードした成田千空(一九二一〜二〇〇七)の両氏が、平成十九年の九月二十一日と十一月十七日に相次いで逝去されました。

お二人を偲び、小野正文が青森県の文学者を広くとりあげた『北の文脈』全四巻、太宰治について書いた『太宰治をどう読むか』『入門太宰治』『太宰治とその風土』など、成田千空の六冊の句集『地霊』『人日』(俳人協会賞)『天門』『白光』(蛇笏賞)『忘年』(詩歌文学館賞)『十方吟』などを展示紹介しています。

第六回青森県近代文学館川柳大会開催

三月二日、第六回青森県近代文学館川柳大会を、青森県立図書館集会所で開催しました。第六回を迎える今年は一〇二名が参加し、作品を競い合いました。また、「伯龍・霜石の川柳トーク」を渋谷伯龍氏、高瀬霜石氏にお願いしました。川柳との出会いから現在までのエピソード、渋谷氏の津軽弁講座と高瀬氏の川柳論、と盛りだくさんの内容で、大いに笑い、深く共感できるお話は参加者に大好評でした。

大会の特選句は次のとおりです。

宿題「なつかしい」須川千恵選  
集まればどっぶり昭和原節子

鳴海はま

宿題「なつかしい」角田古雄選  
お母さんノハナショウブの小道です

滋野さち

宿題「生える」北里深雪選  
頬骨や桜の根より生え出して

野沢行子

宿題「生える」高田寄生木選  
沸点で生える女の落とし蓋

新山風太郎

宿題「遊ぶ」鶴賀一声選  
天狼星(シリウス)を掴んだ父の肩車

高瀬霜石

宿題「遊ぶ」上野しん一選  
手の平で遊ぶしかない紙の鶴

秋田朴人

宿題「こぼれる」大黒谷サチエ選  
十二色全部こぼして生きてきた

堤文月

宿題「こぼれる」三浦敬光選  
マグカップから戦後史が溢れだす

千島鉄男

宿題「歌」柳谷たかお選  
ハミングがびよんびよん跳ねるフライパン

田鎖晴天

席題「歌」波多野五楽庵選  
皆既蝕の真っ只中で歌がない

上野しん一

パネル展開催

平成十六年度にスタートしたパネル展ですが、本年初めて大学を会場として実施されました。会場は以下の通りです。

◆「青森県近代文学館名作展」パネル展

- 八戸西高等学校 7月14日～15日
平内高等学校 11月3日～4日
県観光物産館アスパム 1月24日～3月31日

◆「石坂洋次郎展」パネル展

- 青森南高等学校 7月14日～15日
弘前工業高等学校 7月21日～22日
太宰の宿ふかうら文学館 9月15日～10月6日
県観光物産館アスパム 11月20日～1月23日

◆「大宰治」パネル展

- 青森高等学校 7月7日～8日
七戸高等学校 7月21日～22日
青森高等学校 9月10日～12日
県観光物産館アスパム 9月20日～11月19日

◆「陸羯南と正岡子規」パネル展

- 東奥義塾高等学校 10月15日～17日
弘前実業高等学校 10月19日～21日
弘前中央高等学校 10月22日～24日
弘前南高等学校 10月24日～26日
弘前高等学校 10月29日～31日
弘前工業高等学校 10月31日～11月2日
弘前学院大学 11月5日～7日
青森高等学校 11月7日～9日
青森東高等学校 11月12日～14日
青森南高等学校 11月19日～23日

ギャラリートーク実施

青森県近代文学館の常設展示作家十人とその作品について、文学館解説員によるギャラリートークを実施しました。

- ① 10月20日 高木恭造 『まるめる』
② 10月27日 三浦哲郎 『忍ぶ川』
③ 11月17日 福士幸次郎 『太陽の子』
④ 11月24日 佐藤紅緑 『あゝ玉杯に花うけて』
⑤ 12月8日 石坂洋次郎 『青い山脈』
⑥ 12月15日 太宰 治 『思ひ出』
⑦ 1月12日 北畠八穂 『耳のそのさかな』
⑧ 1月19日 秋田雨雀 『太陽と花園』
⑨ 2月9日 葛西善蔵 『子をつれて』
⑩ 2月16日 今 官一 『作品集「壁の花」』
⑪ 3月8日 寺山修司 『空には本』『田園に死す』
⑫ 3月15日 長部日出雄 『津軽世去れ節』
⑬ 3月29日 北村小松 『マダムと女房』



ギャラリートークの様子

館務日誌

- 4月17日 北海道立文学館 鈴木浩氏来館
4月25日 ふかうら文学館館長、山田邦昭氏来館
4月28日 企画展「青森県近代文学館所蔵作家の手紙展」開会
5月4日 安田喬氏来館
5月21日 特殊資料庫燻蒸5/25
5月25日 陸羯南生誕百五十年没後百年記念事業実行委員会事務局長 舘田勝弘氏来館
5月27日 日曜講座(榎引室長)
6月2日 榎不次男氏来館
6月5日 北海道立文学館副館長 平原一良氏来館
6月8日 櫻庭恵美子氏来館
6月10日 企画展「青森県近代文学館所蔵作家の手紙展」閉会
6月13日 文学資料調査員会議
6月14日 全国文学館協議会総会(東京・榎引室長)
6月18日 就業体験「青森豊学校」1名/6/22
6月19日 太宰治生誕祭出席(五所川原市・榎引室長)
7月14日 特別展「陸羯南と正岡子規」開会、開会式に最上義雄、舘田勝弘、大山謙一、笹森靖司、小笠原豊、齋藤三千政各氏出席
7月20日 「第9回文学散歩青森県」(平川市平賀図書館主催) 27名見学、弘前学院大学 笹森健英氏、野口茂名氏来館
7月25日 総合学習(青森県立青森高等学校1学年・11名)
7月28日 特別展「陸羯南と正岡子規」文学講座① 講師 和田克司氏
7月30日 文学館評議委員会
8月2日 文化庁長官官房政策課課長 小松弥生氏来館
8月4日 羯南研究会 高木宏治氏 亀谷賢氏 日野雅子氏来館
8月8日 南地方学校図書館協議会夏季研修会講師(榎引室長)
8月12日 日曜講座(榎引室長)
8月15日 杉山丕氏来館
8月19日 特別展「陸羯南と正岡子規」文学講座② 講師 齋藤三千政氏、松田修 氏
8月21日 ③ 講師 齋藤三千政氏、松田修 氏
8月24日 陸羯南生誕百五十年没後百年記念事業第5回実行委員会(弘前市・榎引室長)
8月26日 日曜講座(黒岩館長)
8月28日 就業体験(聖和学園短大・1名)
8月31日 陸羯南生誕百五十年没後百年記念展展了/弘前文化センター、松山市立子規記念博物館館長 竹田美喜氏、鎌田慧氏、九州工業大学教授 本田逸夫氏来館

9月1日 陸羯南生誕百五十年没後百年記念フォーラム(弘前文化センター)
9月2日 神奈川大学教授 復本一 郎氏来館
9月3日 就業体験(蓬田村立蓬田中学校・4名)
9月5日 青森市立浜館中学校3学年77名、国語科コンピュータ活用講座受講者19名、青森市立佃中学校2学年3名見学
9月9日 特別展「陸羯南と正岡子規」閉会、鳴海康安氏来館
9月10日 青森市立進道中学校PTA4名見学
9月26日 六ヶ所村立千歳中学校25名見学
10月13日 企画展「生誕110年」淡谷悠蔵展開会、開会式に三野亜沙子、阿部誠也、齋藤葵和子、工藤英寿、各氏出席
10月15日 就業体験「青森大学」4名
10月16日 大鰐町立大鰐小学校6学年49名見学
10月28日 日曜講座(三野亜沙子氏)
11月4日 日曜講座(佐々木主幹)
11月5日 弘前市立弘前第一中学校4名見学
11月7日 北海道立文学館理事 工藤正廣氏来館
11月9日 弘前中央高等学校校長 三上眞一氏来館
11月16日 鯉ヶ沢町立西海小学校1・2学年48名見学
11月17日 青森高校図書学習センター公開講座(榎引室長)
11月21日 企画展「生誕110年」淡谷悠蔵展閉会
11月30日 全国文学館協議会総務情報部会(甲府市・佐々木主幹)
12月8日 弘前市立教育者生涯教育課程芸術文化専攻13名見学
1月19日 企画展「青函連絡船終航20年展」開会、3/25、鎌田清衛氏、サトウユウジ氏来館
1月30日 日本近代文学館研修講座5/21(東京竹浪主事)
3月2日 第6回川柳大会、今公恵氏来館
3月13日 企画展「青函連絡船終航20年展」ギャラリートーク(鎌田清衛氏、サトウユウジ氏)

青森県近代文学館報 第二十五号
平成二十年三月二十日発行
発行 青森県立図書館
青森県近代文学館
青森市荒川字藤戸二一九一七
電話 〇一七—七三九—二五七五
http://www.plib.net/pref.aomori.jp/